歴史探訪

日光と徳川将軍たち

池谷 浩
いけや ひろし
(財)砂防・地すべり技術センター 理事長

1 はじめに

「日光を見ずして結構と言うな」とも言われている日光は、世界文化遺産に登録されている東照宮など人工建築物に加え、華厳の滝や中禅寺湖などの自然景観の美しさも加わって日本有数の観光地となっている。その日光では、一方で明治以後、たび重なる災害、とくに土砂災害を被っている。

日光が有名になるのは江戸後期である。その源には「家康を祀る」特別な土地として世にその名を知らしめた徳川幕府の歴代将軍の姿が見えてくる。そして、その日光でなぜ土砂災害が多発したのか、そのような危険な場所になぜ家康は祀られたのか、これらのことが日光で子供時代を過ごした筆者にとって長い間疑問であった。そこで日光と砂防と徳川将軍たちについて調べてみた。

2 日光山と家康

中世には「院々僧坊およそ五百坊」の繁栄を誇った日光山も、天正18年(1590)年、豊臣秀吉の小田原征伐の際に日光山衆徒が北条氏に加担したことから、中世以来の社領の大部分を没収され、坊舎は座禅寺などわずか9寺のみとなった。

江戸幕府も当初は秀吉の方針を踏襲し、所領は秀吉の時代と同じとした黒印状を日光山に与えている。日光山の繁栄が訪れるのは慶長18(1613)年、家康の命により天海が日光山の貫主となってからである。

家康はこの時、「日光山を関八州の鎮守にする」という考えを自ら固めたと言われている。元和2(1616)年1月に発病した家康は、4月17日、駿府城にて75歳の生涯を閉じた。

死に先だち、自らの死後のことを家康は指示していた。それは「遺体は久能山(静岡)に葬ること、葬礼は増上寺(東京)で行うこと、そして一周忌が過ぎてから日光山(栃木)に小堂を建てて勧請すること」ということであった。

この指示により建立されたのが後に宮を与えられる東照社である写真-1。この神廟経営の総責任者には天海が命ぜられている。

写真-1 日光東照宮（国土交通省日光砂防事務所提供）

また、神号は幕府により「東照大権現」と決められ勅賜されている。そして、元和3年（1617）には久能山の神柩を日光東照社に移すことになる。

じつは、家康は生前一度も日光を訪れていない。にもかかわらず没後、「この地に小堂を建てて祀るべし」と遺言するに至ったのはなぜだったのだろうか。

その理由としては、日光山が古代から関東屈指の山岳信仰の霊山・霊場であり、しかも家康が畏敬する源頼朝の信仰の厚かったところであることから、関東鎮護の霊山として日光山に着目していたことがあげられている。もちろん、もっとも信任していた天海が貫主であることも理由の一つと言われている。

家康の死後、幕府から日光山に莫大な神領が寄進された。具体的には先に領として認められていた足尾村に加え、新たに湯西川村、栗山村など17ヶ所と今市村や、草久村、久加村などが寄進されている。

また、日光山の衆徒と社家が門前にもっている屋敷地の租税を免除し、今後永代にわたって幕府の警察力を門前に入れない（治安維持を日光山に委ねる）といったことも文書で示された。

これらの結果、日光山の所領は最終的には2万5千石と当時の大名並みの所領になった。

3 日光の町並みの形成と家光

日光の町並みの形成史を見てみると以下の三つの出来事が町の成立に大きく関わっている。★1

① 元和3(1617)年の東照大権現の勧請に伴う工事
② 寛永の東照社大改修とその後に行われた新町の移転
③ 寛文2(1662)年の稲荷川大洪水による稲荷町などの移転

①については、現在の上鉢石の町並みは山の中腹を切り広げて造成したもので、その土で大谷川の川原を埋め立てて中鉢石の町幅を広くし、同時に新たな水路を掘削して大谷川の川筋を対岸の小倉山寄りに寄せている。これらの工事は、元和3年、仙台伊達家によって実施されたと言われている。

②については、松原・石屋・御幸の三町が町として形成されていくのが寛永以降である。御幸町については寛永17(1640)年に山内の中山谷にあった新町という名の町を現在の御幸町に移転させたものであり、石屋町、松原町については山内や山外の山際などにあった家を移転させたとされている。それは、寛永11年から13年にかけて行われた東照社の寛永造替工事と無関係ではない。

山内においては俗気を一掃して霊地とし、門前町としての町には新しく区画を整理して家々を集めて、町の発展の基礎を築いたのである。すなわち、江戸幕府の鎮守とするべく家康の神格化と都市計画による、「家康の墓のある東照社の領域を神の領域として、人間社会と分離した町づくり」、いわゆる都市の機能別ゾーニングをしたわけである。その意味でも寛永17年は一つの画期的な年といえるのである。なお、寛永の造替により、今日の東照宮の大規模で精巧な景観がつくり出された。そして、その後、正保2(1645)年には東照社は宮号を宣下され、東照宮となっている。

この東照社の寛永大造替は尊崇する祖父家康のために式年遷宮にならって家光が行ったものである。家光自身日光に10回も参拝し、死後日光山に葬られている。家光の日光を大切に思う気持ちは当然家来にも伝わるもので、慶安元(1648)年、松平正綱が日光街道に並木を植栽し、同3(1650)年には酒井忠勝が東照宮に五重塔を寄進している。日光の町並みはこのようにして基盤が整備され、その後の発展へとつながっていく。

③については、山内の東側の稲荷川に沿って稲荷町という町並みがあり、目付屋敷、火の番屋敷などがあった。

寛文2(1662)年6月14日、稲荷川に大洪水があり稲荷町は荻垣町とともに流失、荻垣町の住人は荻垣面に移り、稲荷町の住人は現在の稲荷町に移転した。寛文2年はすでに家光の死後の時代であり、将軍は家綱に変わっていたが、家光の画いた町づくりの範疇で被災住民の移転が行われたものと考えられる。

このように、日光の町並み形成史からみると現在の観光都市、日光の町づくりは家光によってなされたと言っても過言ではないだろう。とくに「家康の神格化」と「神の世界と人間の世界を分離したゾーニング」は徳川幕府の根幹をなすものであり、その戦略の決定に時の将軍がかかわっていたことは当然のことといえよう。その意味でも日光の町の形成にとって家光の果たした役割は大きなものがある。

4
寛文の稲荷川洪水

これまで述べてきた将軍家の力による町並み形成に加え、自然災害も日光の町並形成に大きな影響を与えた。その代表例が寛文2年の大洪水である。

まずどのような災害であったかは『日光市史(中巻)』に寛文2年6月の『徳川実紀』からの引用として次のような記述がある。

「この八日より十三日までの大風雨によて、山水押し出し、石垣崩頽し、目付小屋圧倒され、目付代うけたまわりし使番田中三左衛門高成、同心十人溺死し、寺一宇にて九人、山麓の市中にては百四十余人圧死したるよし注進す。」

すなわち、災害の原因となった降雨は、6月8日から降り続き13日に大洪水が発生した。洪水はたんに水が出たということではないようだ。「山水押し出し」とあることから水とともに土砂が多量に流出したことがうかがわれる。

事実、荻垣面での河道を掘った断面図図-1によると、

図-1 稲荷川荻垣面附近の堆積土層調査結果*2

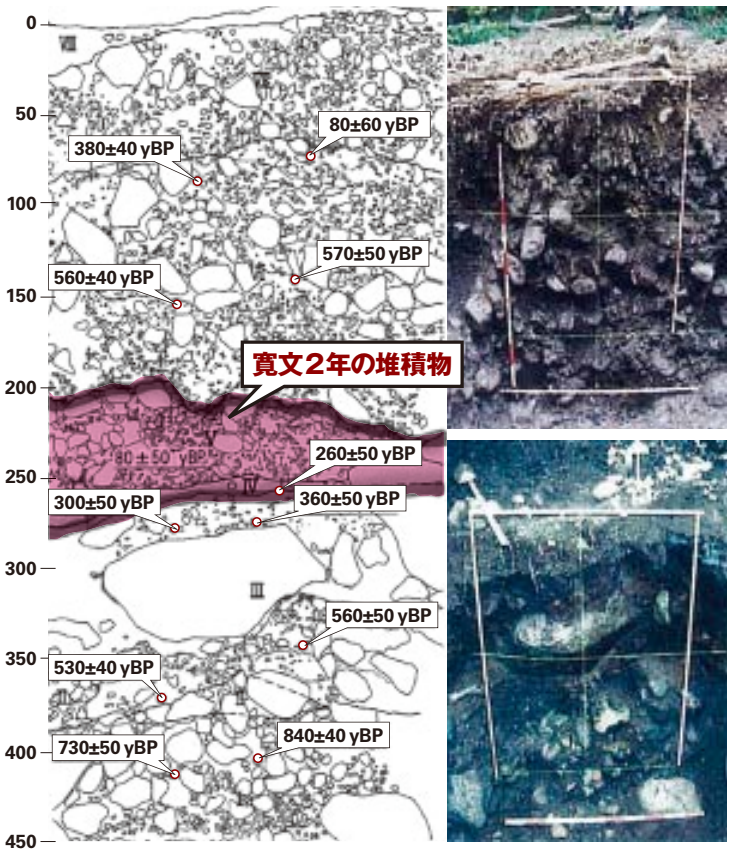
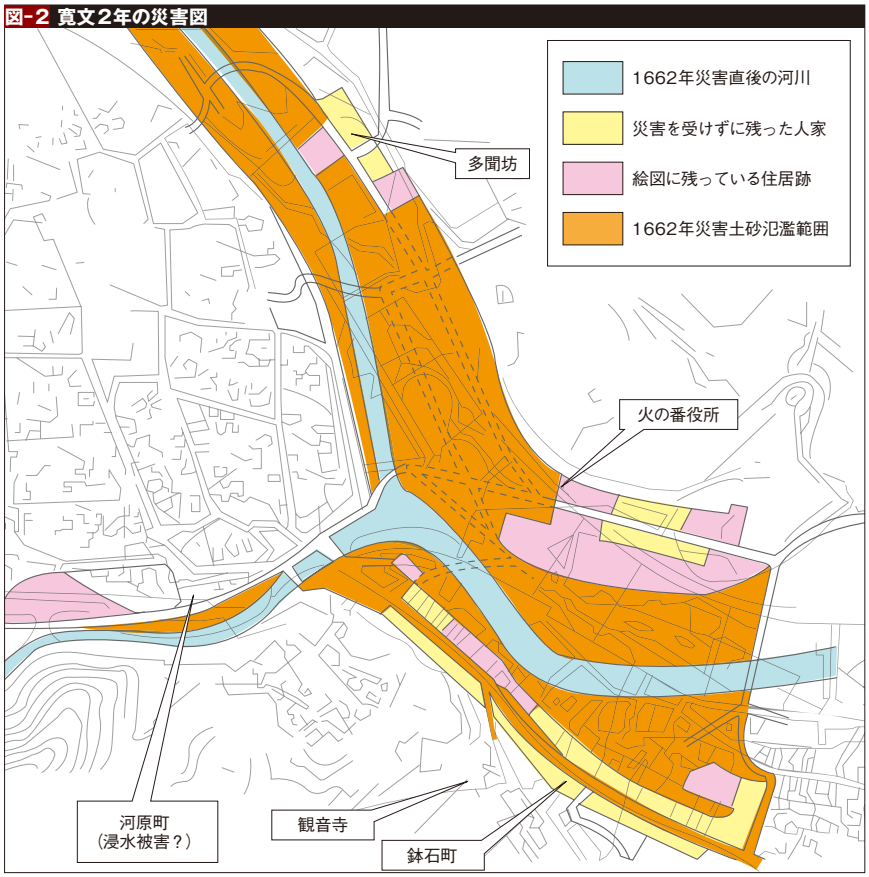


図-2 寛文2年の災害図



深さ210～280㎝のところに寛文2年ごろ（約360年前）の堆積土層が存在していて、その下位に約740年前の堆積層が確認されている。これらの土砂を流域全体で調べた結果、寛文2年の流出土砂の総量は284万㎥と推定されている★2。

このような多量の土砂流出をもたらす原因としては、かなり大規模な山腹崩壊が考えられることから、赤薙山の「大鹿落し」がこの原因となった崩壊ではないかといわれていたが、下流での災害規模や「大鹿落し」の崩壊面がきわめて鮮明であることなどから、現在は稲荷川の七滝付近にあった湖水が決壊したものという説★3がとられている。

参考文献3の古地図に筆者が加筆した土砂の流れの状況は図-2のようである。この図でとくに目を引くのは元の河川の河幅と災害時の土砂の流下した幅の違いである。大谷川本川に比較して稲荷川の河幅の変化が著しく顕著で、災害時の土砂の流れの幅は1662年の災害直後の河幅に比較しても7～9倍という値を示している。

土石流のように多量に土砂を含んだ流れでも河幅変化は数倍程度であり、いかに平常時とは異なる現象が発生したかがうかがわれる。

もう一つの特徴は稲荷川からの土砂と水の流れが日光の町の低位段丘はもちろんのこと、萩垣面のような中位段丘面上を流れ下っていることである。

中位面は1万年以上前に形成された段丘で平時は水がつくことはない面と考えられているところである。

これからも流れのエネルギーの大きな、また規模の大きな土砂の流れが発生したと考えられるのである。このような特別の流れをもたらしたという点からみても湖水の決壊説は信憑性が高い。

この土砂災害による被害については、稲荷町一丁目星野家所蔵の『日光山謂記覚紙数』と題する記録が『日光市史（中巻）』に示されている。この文や同『日光市史（中巻）』に記述されている『徳川実紀』、『竹橋余筆』などの文を総合的に見てみると以下のようになる。

「稲荷町、表町、裏町などで約300軒の家が流出、人馬が流れた。特に住民については被災しながらも助かった人915名、死者は148名となった。」

この災害に対し、徳川幕府は被災者に金千両を支給して住民を支援したことが記録されている。そしてこの災害後、新たに対岸の稲荷町に住民を移転させたのである。

日光の家屋数は貞享元（1684）年に約800戸とほぼ江戸時代のピークに達していることを考えると、この寛文の災害から貞享にかけての約20年間に町は大きく発展したことがうかがわれる。その源には徳川幕府による種々の対応があった。将軍の社参や幕府による神領の寄進は大名・旗本を日光に参らせる役を果たしたのだろうし、東照社の大造替は新たな観光都市日光を全国にPRしたことになったであろう。

多くの人々が集まるところには多くの商人や職人が集まるのも当然のことで、比較的短い時間の間に日光の町は発展をとげていったものと考えている。
それはまた、東照宮を守る日光という町が徳川幕府にとって関八州を治め全国を治めるために大きな役割を果たしていた特別な町でもあった一つの証拠であろう。

5
日光と土砂災害

国土交通省日光砂防事務所が発行しているパンフレット★3に大谷川における経年的な土砂災害の状況が記述されている表-1。

古い時代の白髭水洪水は別として、日光の町で被害が生じ始めるのは寛文2年の稲荷川洪水以後となる。

とくに、日光の家屋数が江戸時代のピークとなる貞享元年ごろから約40年間に、出水による災害が8回も発生している。そして享保8年からはしばらく災害記述がなくなる。

被害の状況を見てみると、人的被害が発生したのは寛文2年（死者148名）と安政5年（死者1名）のみで、それ以外の出水時には家屋の流出や浸水、橋梁の流失の被害のみが記述されている。

災害状況については東照宮社務所が発行している『御番所日記』にも記述がある。たとえば、「一昨夜より大雨、大谷川稲荷川水余程ます」（元禄11年7月27日）などと出水の様子は記述されてはいるものの、被害が生じていない様子がうかがわれる。

土砂災害は自然現象、たとえば土石流が発生・流下してくる場と人間生活の場が重なるところで発生する図-3。

日光の場合も東照宮が造営され町が発展するにしたがって人間生活の場が自然現象発生の場と重なり、結果として災害が生ずるようになった。

とくに、貞享元年から享保8年にかけての約40年間に災害が集中しているのは、まさにこの時期に日光の町が急速に発展していたことと無関係ではない。町の発展にも充分安全を心がけることの必要性がうかがえる事例といえよう。

自然現象についても、寛文2年、稲荷川の七滝付近で大規模な崩壊が発生したことや天和3（1683）年、日光地方を襲った地震により男体山の大薙崩れが発生したことなどにより、日光市街地上流域の山地の荒廃が進む要因が生じた。そのため、その後の降雨により多量の土砂が流下し、災害の原因となったと考えられる。

水源部の山が荒れると土砂災害がいかに発生するかは図-4を見てもらうとよくわかる。大きな土砂のイベント（崩壊など）が発生した後、各10年間ごとに何回土砂災害が発生したかを図にしたもので、日光の場合、約60

表-1 大谷川流域の災害年表★3

	発生年	災害状況	年	備　考
	天文1（1532）～永禄7（1564）	白髭水洪水		
1600			天和3（1617）	東照宮造営
			寛永17（1640）	寛永の東照宮大改修 山内から鉢石宿下流へ民家移転
	寛文2（1662）	6月10日　豪雨により稲荷川の水源七滝の辺の湖水東側竣崖が崩れて洪水押し出し、稲荷町四丁のうち、一丁目を残し、二丁目から下と荻垣町・鍛治町まで三百軒余を押流した。 この時の日光の被害は死者140余人に及んだといわれる。		
	天和3（1683）	7月25日　大谷川大洪水。神橋高欄流失。河沿いの出店は全部流失した。	天和3（1683）	5月23日 日光大地震 男鹿川、海尻地点の右岸が崩壊し、五十里部落が水底に没した。
	貞享1（1684）	3月5日　大谷川、稲荷川洪水。御幸町、松原町等浸水。		
	貞享2（1685）	8月3日　大谷川大洪水。日光仮橋（日光橋）流失、湯屋1軒流失。		
	元禄2（1699）	7月1日　大谷川洪水、神橋危機に瀕す。		
1700	宝永1（1704）	6月29日　大谷川、稲荷川、田母沢出水。日光橋流失。		
	正徳3（1713）	7月4日　大谷川出水。日光仮橋流失		
	享保6（1721）	7月7日　大谷川、稲荷川出水。社寺床下まで浸水。所野村9戸流失。		
	享保8（1723）	8月5日～10日　大谷川、稲荷川、田母沢出水。山内出水。御番所流失。日光仮橋流失。		
1800	安政5（1858）	6月14日　大谷川、赤堀川、行川出水。 死者1、家屋流失、倒壊8戸、田畑流失15村		
	安政6（1859）	7月26日　大谷川、諸川出水。細尾、瀬川、小百、南小倉、針貝他被害。	明治32（1899）	栃木県営事業、稲荷川に着工。
1900	明治35（1902）	9月28日　足尾台風、全県被害。大谷川水源部に崩壊が多発し、洪水により神橋、大谷橋、人家100余戸を流失した。		
	明治39（1906）	7月16日　神橋冠水、大日堂流失、死者1。		
	明治43（1910）	7月　台風、全県被害。		

図-3 災害の発生する場.

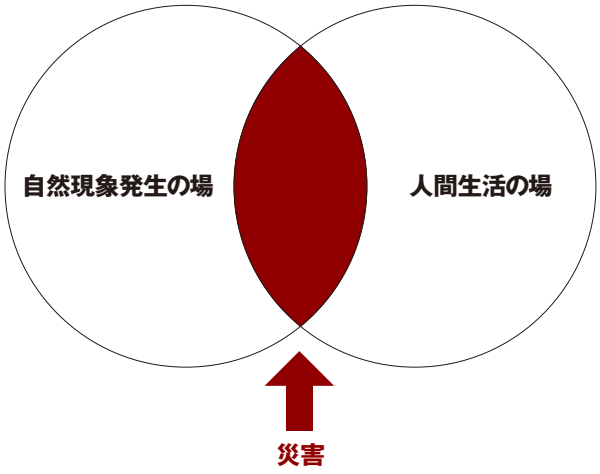
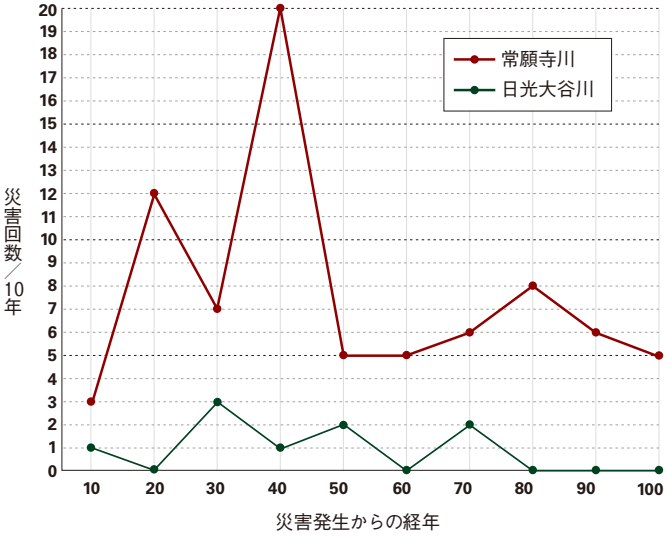


図-4 土砂移動のイベントとその影響



年間災害が続いたことになるが、より大きな土砂のイベントが発生した常願寺川（水源部で約4億㎥の土砂崩壊が発生）では100年経っても災害はなくならなかった★4。幸いにも、日光での土砂イベントはそこまで大規模ではなく（七滝沢の大崩壊では崩壊土砂量は約180万㎥といわれている★2）、その影響も短かったのである。

日光における被害をもたらす災害は、享保8年を最後にしばらくの間発生していない。これは何を意味するのであろうか。

6
防災対策と町の安全

それまで土砂災害を何度も被ってきた日光の町に土砂災害がなくなっていくのは明らかに徳川幕府による災害対策、とくにハード対応がなされたからと筆者は考えている。以下にその防災対策の具体的内容を紹介していこう。

寛文2年の大災害に対しては、新たな町を安全なところに移転させたこと以外よくわかっていないが、貞享の災害に対しては『御番所日記』に以下のような記述がなされている。

たとえば、貞享2年8月13日の日記に

一，　鉢石町川除御普請御金二千両江戸より来候由……

一，　鉢石町川除大普請今日より始まり候由

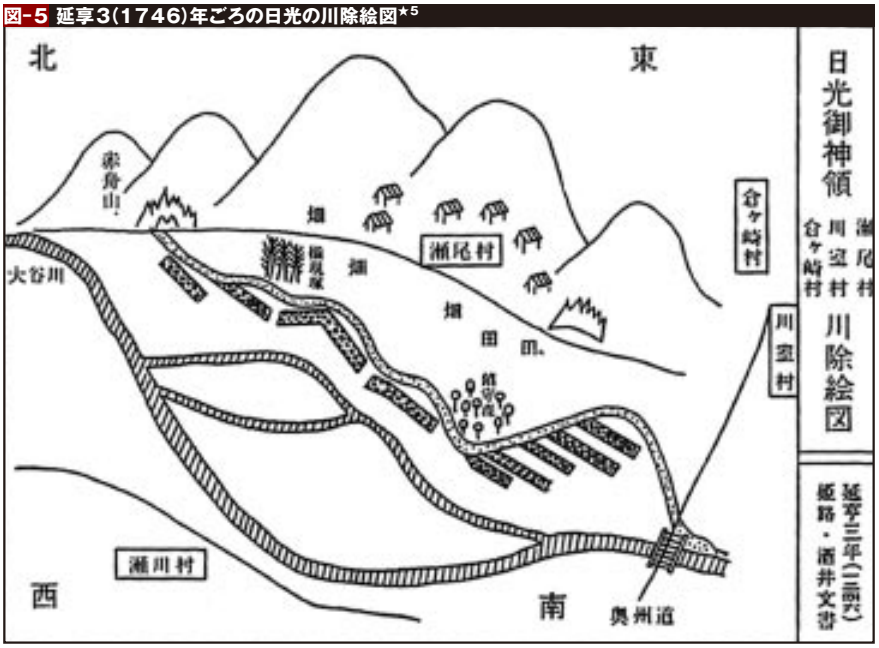
とあり8月3日の日記に書かれている「大谷川水出鉢石町坂ノ下湯屋一軒押流、仮橋鉢石の方半分押流候」という災害への対応がなされていることがわかる。そして何よりも災害対策資金としてただちに2000両（1両を約10万円とすると2億円となる）が用意されているところをみると、時の幕府が日光へ特別な対応をしていたことを示すものといえよう。この災害対策については、翌年の5月10日や23日の日記に「川除御普請見廻りのため川原まで参候……」と川除工事が継続して行われていた様子が記述されている。

同時に宝永元年6月29日の災害に対しても8月15日の日記に「今日より川原御普請初」との記述があり、元禄12年7月1日の出水により稲荷川で災害が発生し、「川原出見世五間残し皆流れ、深教坊、勝泉坊寺まで水がついた」という災害に対しても同年8月16日の日記に「今度の川原普請のため御奉行鈴木兵九郎殿、甲斐庄喜右衛門殿今日御着任……」とあり、幕府の日光における災害対応の早さがうかがわれる。

とくに、正徳3年7月4日の災害に対して川原普請が急がれることが7月9日の日記に記述されるなど、日光の役人からの徳川幕府への報告の速さ、対応の早さも目立つ。これは日光の町の安全に関して一つのシステムができあがっていたことを示すもので、その意味でも日光は特別な場所であったと考えられる。

具体的な対策としては、すでに延享3（1746）年にかなりの川除がつくられていたこと★5が図-5から判明している。川除絵図による川除は連続堤ではなく水制的な配置で画かれており、水衛部に堤が造られ、壊されたらまた直すという手法がとられていたようだ。また、この

図-5 延享3(1746)年ごろの日光の川除絵図★5



時代の工法としては立篭や二間蛇篭に石を詰めたものが使われており、篭は竹で編まれていた★5。

このような対策は主に綱吉、家宣、家継および吉宗の時代に実施されている。しかし、徳川将軍が直接指示したものとは考えにくい。むしろシステムとしてすでにできあがっていたもののなかで各担当者が忠実に実行していったと考えるほうが妥当である。ちなみに、慶安元(1648)年には幕府の目付が日光山に在勤するようになる。そして元禄13(1700)年には目付の在勤を廃して日光奉行を置いている★6。

とくに江戸幕府の老中を勤めた水野忠之も元禄11(1698)年4月に日光目付、同9月に日光普請奉行となっていること(ウィキペディア)からみて、幕府の官職のなかでも日光に関係する官職の重要さがうかがえる。

このように徳川幕府の手による日光の町の安全づくりは一応功を奏したようにみえた。

しかし、より大きな土砂移動のイベントに対してそれまでの対応は充分ではなかったようである。

明治35(1902)年9月28日、台風に伴う豪雨により大谷川の水源部では崩壊が多発し多くの被害を出すなど、栃木県下では死者・行方不明者219名、家屋全壊8217戸という大きな被害が発生した。

稲荷川水源部の大鹿落し(推定崩壊土砂量430万㎥)の拡大はこの時ではないかと井上公夫は推定している★7。

このような大きなイベントが発生すると、これまでとは違う新たな防災対応が必要となる。

稲荷川では明治32年に栃木県営事業により砂防事業が開始されていた。しかし、明治35年の大災害をはじめとして39年、40年、43年、そして大正3年と引き続き災害に見舞われた日光の町を守るべく大正7(1918)年、内務省第一土木出張所稲荷川工場が設置され、国の手による砂防事業が始められた。防災の主役が県から国へと移ったのである。

毎年8月21日に「日光砂防祭」(主催:日光砂防協会)が開催されている。これは昭和48年より実施されているもので、砂防工事関係殉職者を慰霊するとともに安全で豊かな日光をつくるためには砂防事業が必要であるというメッセージを伝え続けている。

その祭の日は大正7年8月21日稲荷川に国の直轄砂防事業が始められた日としている。このような地域からの強い応援を受け、国土交通省日光砂防事務所の職員は一丸となって地域の安全と安心の創出に努力しているところで、平成14年までに堰堤工27基、山腹工38基などの砂防設備が完成している写真-2。このように永年にわたる砂防事業によって今、日光の町は土砂災害に対する安全と安心が守られているのである。

7 おわりに

日光を特別な町として発展させていったのは徳川家の歴代の将軍たちであったことがわかる。しかし、日光という町は元来自然現象に対してけっして安全なところであったわけではないこともおわかりいただけたと思う。すなわち、徳川の将軍たちも自然災害に対し安全なところに「家康を祀った」ものではなかったのである。むしろ、現在世界的にも有名となっている観光地、日光の町を災害から守り、安全を確保していったのは、将軍たちというよりも徳川幕府の行政システムであったといえよう。そして、徳川幕府にとってとくに重要な場所である日光

写真-2 現在の稲荷川の状況（国土交通省日光砂防事務所提供）

を、多くの人々の手により災害を契機に一つずつ安全にしていったものと考えるほうが妥当である。

考えてみれば、日本という国で絶対に災害から安全な場所といわれてすぐに思い当たるところはない。このような自然現象の多発する国において安全で安心して生活できる地域を創出してきたのは、時の幕府やその後の政府による防災対策、とくにハード面の対策の実施が大きな役割を果たしている。もちろん、住民による「生活の知恵」もあっただろう。しかし、一人の人間の力だけではどうしようもない自然現象の発生は古くから存在していた。これらを時の為政者が住民を守り、地域を守るために努力してきた一つの事例が日光で示されたものと考えている。

すなわち、防災対策にはハード面による安全な地域づくりとソフト面による生活の知恵がともに重要であることを現代のわれわれに教えてくれているのである。日光がこれからも災害に対して安全で安心して生活できる場であることを願って筆を置くこととする。

8
謝辞

本文全般にわたり、日光市が発行した『日光市史』を参考とさせていただいた。とくに「日光山と家康」、「日光の町並みの形成と家光」の項は『日光市史』をもとに記述し、一部文献を引用させていただいている。また、写真については国土交通省日光砂防事務所から提供していただいた。記して感謝申し上げる次第である。

★参考文献

1 日光市史編纂委員会：日光市史，中巻、日光市、昭和54年12月
2 国土交通省日光砂防事務所：まちといのちを守る砂防、日光稲荷川、寛文二年の土砂災害を巡る、パンフレット
3 建設省日光砂防工事事務所：悠久の時に刻む、平成10年9月
4 立山砂防工事事務所年表編集委員会：常願寺川の歴史を尋ねて、立山砂防工事事務所、昭和52年3月
5 森 豊：日光の災害、大日光、昭和47年11月
6 柴田 豊久編：近世日光災害史料、国立国会図書館蔵
7 井上 公夫：土砂災害の地形判読実例問題、中・上級編、古今書院、平成18年7月